



たかがい恵美子参議院議員が厚生労働委員会で質問、看護師の役割拡大などを提言

5月30日の参議院厚生労働委員会で、たかがい恵美子参議院議員が質問に立ちました。

たかがい議員は、在宅で最期を迎えたいという希望が増えてきており、国も医療の地域へのシフトを進めようとしてきたものの、いまだに8割以上が病院などの施設で亡くなっており、実効のあるものとなっていないと指摘し、より効果的な施策が必要ではないか、と質問しました。これに対し、馬場厚生労働大臣政務官は、家族の希望などに対応できる人材の育成や救急体制での本人の希望確認など、さまざまな施策を講じていきたいと答えました。

つづいて、医療・介護保険におけるターミナルケア評価と算定状況、今後の展望について質問しました。厚生労働省の鈴木保険局長は、訪問看護の看取り加算などの数字を紹介し、最期を迎えるにあたって様々なニーズに対応したいと答えました。

たかがい議員は、在宅医療の問題として、従事する医師・看護師が圧倒的に少ないうえ、なかなか増えない点を指摘しました。一方で、単身世帯が増加していっており、コミュニティの構成が変わりつつあることも指摘しました。このような前提のもとでの地域ケアの制度設計が必要であり、医師・看護師など専門職の新たな活用を考える時ではないかと質問しました。馬場政務官は、在宅医療の高まりにきめ細かく対応できる体制づ

くりをしっかりと講じる必要があり「新たな医療の在り方を踏まえた医師・看護師等の働き方ビジョン検討会」の報告書が示した施策などに取り組んでいきたいと答えました。その一例として、今年度から遠隔地で医師が死亡診断できるように看護師が情報提供するための研修などが予定されていると述べました。たかがい議員は、海外における地域医療の取り組みとして、診療看護師やフィジシャン・アシスタントを活用している例を紹介し、医療職間の業務移管を進めることで、時代の変化に即した制度設計を図ることが可能ではないかと提案しました。

一方、在宅で看取った家族に対するグリーフケアも進めて欲しいと、たかがい議員が訴えました。馬場政務官は、グリーフケアの重要性について周知するための方策を検討していくと答えました。

また、家族構成のへんかん変化に伴い、いのちの教育と健康教育の充実が必要になってきていると指摘し、教育の現場での取り組みについて質問しました。これについて、文科省の白間審議官は、生活科や理科、道徳の授業などを通じて生命の尊さと自他への尊重などを指導してきたが、新しい学習指導要領では、生命の大切さを実感できる体験学習も行うことにしたと答えました。

臓器移植に関する知識の普及促進とドナー家族支援の強化についての質問では、厚労省の福島健康局長が、若年層への知識普及について検討するとともに、実施体制の整備充実を図り、一方でドナー家族への支援施策も種々講じていると答えました。たかがい議員は、臓器移植の促進とともに、生命を慈しむ教育を進めて欲しい、健診をきっかけとする健康意識の拡大・高揚はできないものかと質問しました。福島健康局長は、健康診断は、自分の健康状態を知る重要な機会と捉えており、この観点からも普及啓発に取り組みたいと答えました。

このあと、薬価制度の見直しと創薬環境の強化のバランスについて、女性活躍加速のための旧姓使用の拡大及び医療職における旧姓拡大の取り組みについて質問。最後に、厚生労働省は一刻も早く受動喫煙ゼロ戦略を力強く押し進めて欲しいと述べ、質問を終えました。

この質問の様子は参議院インターネット審議中継でご覧になれます。